

人 物

小林竜二（五十五歳） 演歌歌手

加藤守（五十二歳） 小林のマナージャー

齊藤良一（五十八歳） 町長

○湖側 屋外ステージ

百人くらいが腰掛けられるステージ前の座席に、三十人程の老年男女が腰掛け雑談している。ステージから演歌風のイントロ音楽が流れてくる。同時に聞こえてくるナレーション。

ナレーション「ついに今年でデビュー三十周年、演歌会のプリンス小林竜二が今年も野尻湖にやって参りました。歌うのはもちろんこの曲。《湖で溺れるくらい愛して》、皆様盛大な拍手でお迎えください」

拍手喝采する老人達。

○同ステージ舞台裏

小林竜二と加藤守が言い争っている。

小林「おい、守。やつぱりずれてるだろカツラ」

ずれたカツラを一生懸命整える小林。

加藤「小林さん、もつとも右、右だつて。てか早くしないと曲始まりますよ、早く！」

小林「おい、ふざけんじやねーぞ。ずれたま
ま出るくらいなら俺は歌わんぞ！」

加藤「もうバレてるから大丈夫ですよ、すこ
しくらいずれてたって」

小林「なんだとバカヤロー。バレてる分けな
いだろ」

小林に近づきカツラを整えようとする
加藤。いらいらした小林が加藤をつき
とばす。突き飛ばした勢いでカツラが
地面に落ちる。

小林「あー、何やってんだ守、ぶつ殺すぞこ
の野郎！」

カツラを慌てて拾い小林の頭にのせ整
える加藤。

加藤「これで大丈夫です、早くもう曲しまつ
てますよ」

小林「うるせー、お前が悪いんだろ」
会場から聞こえてくる罵声。

観客「何やってんだよー！」

加藤を睨みステージに出て行く小林。

○同ステージ

カツラを真逆にかぶった小林がステージに出ってくる。会場から拍手と笑い声が起こる。その理由に気づかない様子で歌い始める小林。

× × ×

満足げに小林を見つめる老人達。歌い終え礼をする小林。ズレ落ちそうになるカツラ。慌ててそれを抑える小林。会場から起こる笑い声と盛大な拍手。笑みを浮かべながら、急ぎ足でステージ裏に戻る小林。

○同ステージ舞台裏

不機嫌な様子で加藤に近寄る小林。

小林「この馬鹿野郎。もうちよつとバレるところだったじゃねえか！」

マイクを加藤に投げつけ掴み掛かる小林。必死で抵抗する加藤。加藤に投げ飛ばされる小林。ずれ落ちるカツラ。

小林、加藤を睨みつけ、

小林「クビだ！もうお前みたいな奴と一緒にやっけてられるか！」

加藤「よくもそんな口きけるなこの野郎！」

加藤の怒った様子に驚く小林。

加藤「誰の支えがあつて今日までやってこれたと思つてんだ。俺がいなかったらあんたなんてとつくにのたれ死んでるところだぞ」

小林「誰に偉そうな口聞いてんだお前は、だいたいお前がたいしたことないから仕事かねえんだろ。湖で呼ばれるコンサートばかりじゃねえか。テレビの仕事はどうなつてんだ！」

加藤「それはあんたが湖のヒット曲一曲しか出せなかつたからだろ。そんな一発屋の世話する俺の気持ち、考えたことあんのか」

怒りを抑えた表情で加藤に詰め寄る小林。

小林「誰が一発屋だと。お前、そんなこと思つて俺のマネージャー三十年もやってきた

のか」

小林をじつと睨む加藤。

加藤「ああ、そうだよ」

少し震えながら拳を握りしめる小林。

そのままじつと小林を睨む加藤。握り

しめた拳を振り上げる小林。身構える

加藤。振り上げた拳を下ろし、加藤に

背を向け落ちてしているカツラを拾う小林

。背中越しに小林、

小林「もうお前の顔なんざ見たくもない、今

日の後援会の打ち上げも顔出すな」

加藤「出さねえよ。明日俺一人で東京帰るか

らな」

小林「勝手にしろ」

そのまま歩き去っていく小林。

○小料理屋個室（夜）

会場に来ていた老人達の数人と一緒に

酒を飲んでいる小林。

老人1「いやーしかし小林さん、今年も野尻

湖まで来てもらいありがとうございます」

小林「嬉しそうな表情を浮かべ、

小林「こちらこそ、こんな毎年呼んでもらつて
て光栄ですよ。こうやって皆さんとうまい
酒も飲めるし」

突然部屋の襖が開き斉藤良一が入って
くる。恐縮した様子の老人達。

老人2「あつ、小林さん紹介します。今年か
らうちの新しい町長になられた斉藤良一さ
んです」

立ったまま小林を見下ろす斉藤。

小林「どうも、毎年お世話になってます」

どっかり腰を下ろす斉藤。小林をじつ

と睨み、

斉藤「どうも、斉藤です」

斉藤に慌ててビールを注ぐ老人3。気
まずい雰囲気が漂う。小林、遠慮した
様子で、

小林「あ、あの、お手洗い行ってきます」

襖を開け部屋を出て行く小林。

× × ×

○同個室手前の通路（夜）

手洗いから戻ってくる小林。中の様子に聞き耳を立てる。

○同個室（夜）

不機嫌な様子的小林と静かに酒を飲んでいる老人達。

齊藤「来年からあの演歌歌手は呼ばんからな。あんな一発屋。たいしたニュースにもならんし、町全体の活性化に何の貢献もしたらん。税金の無駄遣いだ」

老人4「しかし町長。あの人が毎年来てくれることで、なんかこう、生きとってよかつたなあ、つてしみじみ思うんですわ」

老人4を睨む齊藤。

齊藤「そんな老人の戯言、俺が聞き入れると思つか。とにかくあの小林は今年で終わりで。分かったか！」

悲しそうに俯く老人達。

○同個室手前の通路（夜）

中のやり取りを聞いている小林。悲し
そうな表情をしてその場を立ち去る。

○居酒屋 養老の滝店内（夜）

酔って顔を赤らめた加藤がカウンター
に腰掛けている。店内には小林の若い
頃のポスターが張られている。それを
見た加藤、板場の店主に向かつて、

加藤 「おい親父、こんな古くさいポスターさ
つさと捨てちまえ、胸くそ悪い。こんな一
発屋のポスター張ってたらな、あんたの商
売もうまくいなくなるぞ！」

店主、加藤をちらりと見て、

店主 「そうですねかお客さん？私、最近出した
《湖で道連れ》って曲も好きですけどね」

CDを取り出しコンポに入れる店主。

小林の歌声が流れてくる。

店主「あたしや結構好きですよ、やっぱり」
じつと曲に聞き入る加藤。

○湖（夜）

湖の上に浮かぶ一隻のボート。ボート
の上では、小林が自分の姿がジャケット
トのシングルの口を片手にじつと見つ
めている。

○同ボート乗り場（夜）

小林の歌を口ずさみながら歩いくる加
藤。湖の上にボードが浮かんでいるの
に気づく。

○同ボートの上（夜）

手にしていた口を突然湖に投げ捨て
ようとすする小林。しかしその弾みでバ
ランスを崩し水の中に落ちてしまう。

小林「ああ、まずい」

必死でボートを掴もうとする小林。し

かしボードは風に流されどどん離れていく。

小林「まずい、まずい」

次の瞬間、溺れる小林のもとに突然ボートに乗った加藤が現れる。

加藤「何やってんだあんた、こんな夜中に」

小林、苦しそうに

小林「お前こそ、なんでこんなとおに」

加藤のボートに掴まろうとする小林。

加藤「やめろ、一人乗りだぞこのボート」

小林がボートに掴まった拍子にバランス

スを崩し加藤も水の中に落ちてしまう

加藤「何してくれやがんだ、この野郎！」

小林「俺が湖で溺れ死んぢあら、永遠の湖の

演歌歌手つちゆえ、世間で言われちまうで

いやねーか」

加藤「そんなこと俺の知ったことか！助けるからちよつとじつとしてろ！」

苦しそうに、しかし少し嬉しそうに

CDを手を持ったまま溺れる小林。